



きっちり足に合った靴さえあれば、
じぶんはどこまでも歩いてゆけるはずだ。
そう心のどこかで思いつづけ、
完璧な靴に出会わなかった不幸をかちながら、
私はこれまで生きてきたような気がする
行きたいところ、行くべきところぜんぶに
じぶんが行っていないのは、
あるいは行くのをあきらめたのは、すべて、
じぶんの足にぴったりな靴をもたなかった
せいなのだ、と

「ユルスナールの靴」より

須賀敦子